

令和6年度自己評価計画書に対する最終報告

石川県立金沢辰巳丘高等学校

重点目標	具体的取組	主担当	現 状	評 価 の 観 点	達成度判断基準	判定基準	備 考	集計結果	分析(成果と課題)と改善策等
1 ICT機器の効果的な活用により、個別最適な学びと協働的な学びを一体的に充実させ、学習意欲の向上や学習習慣の定着を図るとともに、課題を発見し解決できる力を育てることを通じて、個々の進路実現を目指す。	① 全ての教員が研究授業・公開授業を行い、授業参観や校内外での研修、教員間の研究会を設定し、ICT機器及びアプリケーションを効果的に活用する授業スキルの研鑽を継続する。	教務課 情報課 各教科	全教員がICT機器を効果的に活用した授業改善を積極的に行っているが、授業に生用端末を効果的に組み込んでいない場面もみられる。ICT機器の操作スキルの向上、環境整備、授業での効果的な使い方についての研究の継続を行うことで、授業実践力を上げていく。	【努力指標】 年間を通して、ICT機器およびアプリケーションを効果的に活用した授業実践を継続的に行っている。	ICT機器を効果的に組み込んだ授業を実践していると答える教員の割合が A 90%以上である B 80%以上である C 70%以上である D 70%未満である	C評価以下の場合 は、結果を分析して改善策を検討する。	7月、1月に調査する。(教員によるアンケート)	75.8% C R5:70.6:C	ICT機器の効果的に組み込む実践を継続すること、実際に効果的であったかの評価の差が回答に影響していると考えられる。今後も引き続き、ICT機器の操作スキル向上、環境整備、効果的な使い方等の授業研究の継続をすることで、授業実践力を上げていく。
	② 指導と評価の一体化と学習計画に沿った指導と評価を実施することによる、生徒の実態に合わせた改善を学校あげての継続的な取組とし、各教科で定着させていく。	教務課 各教科	個に応じた指導を実践していくうえで、本校の多様な生徒たちに有効であると考えられることから、従来の取組を継続していく。今後は、教員が評価疲れにならないためにも、各評価のタイミングや内容の見直しをする機会を設定していく。	【努力指標】 各教科で指導と評価の一体化を実現するために、授業評価を参考に授業の改善・充実をはかると一連のサイクルを確立する。	指導と評価の一体化の趣旨を理解し、授業、学習評価、学習評価に基づく授業改善の一連のサイクルを実践していると答える教員の割合が A 80%以上である B 70%以上である C 60%以上である D 60%未満である	C評価以下の場合 は、結果を分析して改善策を検討する。	7月、1月に調査する。(教員によるアンケート)	93.1% A R5:100:A	中間試験後にも評価を入手するなど、短期的に評価し生徒へフィードバックを行ったことで、生徒の変化が見えやすくなったため、教員の意識がより一層高まったと考えられる。次年度以降も、評価方法の精選や課題・評価物が効果的な内容になるように計画的に進めていく。
	③ 生徒が授業以外で学ぶ習慣を身につけるために、ICT機器を活用して学校外で学習する予習・復習のための課題の提示や、定期テスト等と結びつけた計画的な学習指導を行う。また、引き続き学ぶことの楽しさを体感するような授業の実践とICT機器の機能を活かした課題等で学習に取り組みやすい環境を整備する。	教務課 各学年 各教科	学習時間が1時間以上の生徒の割合が、前年度より微増したものの、48.6%と少なく、定期試験直前を除き継続して学習に取り組む習慣が定着していない。コース間の差が顕著にみられるため、コースや個人の目標設定と現状把握をしながら学習習慣に対する指導を行うとともに、各教科は、課題の内容の質・量のバランスを相互に検討していく必要がある。	【成果指標】 各教科でICT機器を活用して計画的に課題を設定し、その提出や評価を適切に行う。放課後学習や自己実現のための学習を含めた授業以外の学習時間の確保をはかる。	平日の学習時間(授業以外)が1時間以上であると答える生徒の割合が A 80%以上である B 70%以上である C 60%以上である D 60%未満である	C評価以下の場合 は、結果を分析して改善策を検討する。	7月、1月に調査する。(生徒によるアンケート)	71.8% B R5:48.4:D	昨年度と比較して大幅に数値が向上した。学年別では2年は年間平均の52.4%より、3年12年同時期の40.0%より著しく増加しており、各学年団の粘り強い指導と各教科の評価と指導の一体化による適切な評価が、生徒の意識の変化を促した結果と考えられる。今後、次年度以降の継続、より一層の向上のためにも、より詳細な検証をすすめていく。
	④ 継続的な個人面談と計画的なキャリア教育の実践により、個々の生徒が目標を明確化させ、有意義な高校生活を送ることができるよう支援を行う。進路関係の行事においては、生徒が主体的に参加できる形式の割合を増加させる。また、学校行事や部活動で得た達成感が将来の目標設定につながるよう工夫する。	進路指導課 各学年	保護者対象進路説明会等、進路情報を学校から発信する機会への告知方法を工夫することにより、関係行事への保護者の参加数が増加、本校の指導状況を理解していただく機会を拡充することができた。 また、自分の関心事と学園領域をつなげ、進路調べが出来るオンラインサービスを各学年希望者に導入するなど環境が整備されてきたことあり、より個に応じた進路指導を推進してきたい。	【満足度指標】 生徒が主体的に学ぶように、本校でのキャリア教育が計画的かつ効果的に機能し、生徒の進路目標が明確化している。	本校でのキャリア教育が、生徒の主体的な活動を通して意義あるものとなっていると答える生徒の割合が A 90%以上である B 80%以上である C 70%以上である D 70%未満である	C評価以下の場合 は、結果を分析して改善策を検討する。	7月、1月に調査する。(生徒によるアンケート)	80.6% B R5:79.9:C	今年度は探究活動と連携し、進路決定に必要な自己理解や主体的に取り組む姿勢の育成に努めてきた。そのうえで各種ガイダンスや大学見学、インターンシップ等、実社会への理解を深める機会をより効果的に提供できるように改良を加えていきたい。また、必要な学びや情報を自ら調べるために、オンラインサービスの活用について、さらに工夫を施していく。
学校関係者評価委員の評価	<ul style="list-style-type: none"> アンケートへの高い回答率から、保護者・生徒の本校に対する関心の高さがうかがえる。 ICT機器の活用と学習理解の向上について、あらかじめ数値として確認することができた。 学校生活における目的意識や進路意識が高いことが、学習時間の増加やより積極的に学校行事に関わろうとする生徒の増加に繋がっていると理解できた。 多様な進路に対応し得る説明会や学習の機会をさらに充実させていってほしい。 								
学校関係者評価委員の評価結果を踏まえた今後の改善策	<ul style="list-style-type: none"> 今年度の新たな取組により改善したアンケート結果をもとに知り得た、保護者・生徒の意見や要望を詳細に分析し、今後のより効果的な実践に繋げていきたい。 ICT機器の活用やDX化を意識した教育活動について研究し、より深化させていきたい。 地域や外部団体と連携した多様な進路を学ぶ説明会や保護者に対する進路説明会をより充実させていきたい。 								
2 挨拶や時間管理、服装容儀などの指導を通して、基本的な生活習慣を身につけ自律性を高める。また、外部の方との対話を通して、協調性やコミュニケーション力を育む。	① 生徒の遅刻状況に関する情報を全教職員で共有し、個人及び学級・学年ごとの集団等にそれぞれ対応した指導を行い、時間や期限を守ることの大切さを自覚させる。また、保護者との連携を密にし、遅刻の減少を目指すことで規範意識の涵養をはかる。	生徒課 各学年	自家用車での送迎の増加による渋滞と遅刻の深刻化に対応、生徒・保護者に対して、文書による可能な範囲での通学方法の見直し呼びかけや予備入学での新入生保護者への働きかけを行う等、遅刻数の減少に取り組んでいる。保護者との協力体制が構築されてはきているが、遅刻常習者は依然として存在するため、引き続き指導を行っている。	【成果指標】 年間を通じて遅刻5回以上の生徒の割合が、令和5年度の14.9%を下回るようにする。	年間を通して遅刻5回以上の生徒の割合が A 10%未満である B 15%未満である C 20%未満である D 20%以上である	C評価以下の場合 は、結果を分析して改善策を検討する。	年度末に調査する。	19.9% C R5:14.9:B	2年生・3年生の数値が、昨年度の1年・2年時から横ばいである一方、1年生の数値が増加しており、全体として遅刻割合の増加に繋がっている。遅刻数の減少に向けて継続した指導に取り組んではいるものの、通学バスの運行便数の減少により、定期試験に登校する生徒が構造的に増加したことも、その一因となっている。
	② 協調性やコミュニケーション力を育てるために、探究活動等による取組を通して、地域や外部の方々と積極的に関わる機会をさらに増加させる。また、芸術コースの生徒が地域の行事に積極的に参加することで、本校の活動や取組を発信していく。	教務課 各学年	「総合的な探究の時間」は活発に行われているが、諸課題の解決・改善策を検討・考察するための深化が必要であると考えられる。こうした経験を通して、生徒の自己有用感や自己肯定感を高め、さらに豊かな人間性と社会性を育てることができるよう取り組んでいきたい。	【成果指標】 地域や自分たちに関わる諸課題の解決・改善策を検討・考察することで、自己有用感や自己肯定感を高め、探究活動の拡充をはかっていく。	「総合的な探究の時間」における活動において、協調性やコミュニケーション力が身についたと答える生徒の割合が A 80%以上である B 70%以上である C 60%以上である D 60%未満である	C評価以下の場合 は、結果を分析して改善策を検討する。	7月、1月に調査する。(生徒によるアンケート)	79.2% B R5:興関	外部人材との交流の積み重ねが効果的であったと考えられる。また今年度より、交流方法をグループ活動から個人での活動としたことで、全員が意見を交換する必要性が生じたことも常与していると考えられる。次年度以降も継続するとともに、交流を苦手とする生徒への支援方法を検討していく。
学校関係者評価委員の評価	<ul style="list-style-type: none"> コロナ禍のなかで中学校時代を過ごし、定期から始まり定期に終わる生活に慣れない生徒が少ないことは理解できるが、社会人となったときに適応できるよう、引き続き遅刻を改善する取組を行ってほしい。 校外の組織・団体等と協力することが、「総合的な探究の時間」の活動に際しての、一部生徒の苦手意識の払拭につながるのではないかと。 								
学校関係者評価委員の評価結果を踏まえた今後の改善策	<ul style="list-style-type: none"> 通学バスの運航便数現象等、環境要因により従来の生徒たちと比較して、より早い時間に家を出てこなければならない生徒の割合が増加してきているが、時間を意識し、守ることは社会生活を送るうえで基礎となる重要なスキルであるため、今後も遅刻状況の改善のための取組を継続していく。 「総合的な探究の時間」の活動における地域との連携の推進によって、生徒のコミュニケーション能力の向上に努めていきたい。 								

重点目標	具体的取組	主担当	現 状	評 価 の 観 点	達成度判断基準	判定基準	備 考	集計結果	分析(成果と課題)と改善策等	
重点目標	具体的取組	主担当	現 状	評 価 の 観 点	達成度判断基準	判定基準	備 考			
3	校種間交流や地域と連携した探究活動を積極的に、地域や自分たちに関わる諸課題の解決・改善策を検討・考察する経験を通して自己有用感や自己肯定感を高める。さらに、豊かな人間性と社会性を育むことによって、保護者・地域から信頼される学校づくりをより一層推進する。	① 地域及び近隣の小・中学校、大学等との交流活動を通して本校の教育活動への理解と協力を促進する。また、その情報を各種の広報活動を通して発信していく。	総務課 各コース	様々な活動に対して事後の広報には取り組めているが、事前案内に関してはまだまだ不十分である。直前になってその行事について知ったという保護者からの意見もあることから、メール配信等による案内の徹底をはかっていきたい。	【満足度指標】 各コースの特色を活かした地域や小・中学校、大学等との交流活動等について、その取組や内容が保護者等にしっくりと伝わり、活動に対しての理解や協力を得ることができる。	各種の交流活動等について、広報活動を通して学校の取組みがよくわかると答える保護者の割合が A 90%以上である B 80%以上である C 70%以上である D 70%未満である	C評価以下の場合 は、結果を分析して改善策を検討する。	7月、1月に調査する。(保護者によるアンケート)	86.5% B R5:79.0:C	ホームページの内容やレイアウトの工夫により、活動や成長の様子が見えやすいものとなり、中学生やその保護者にとっても学校の様子をリサーチする上でわかりやすく情報提供ができています。在校生の保護者に関しては定期的にチェックしようとする習慣が定着するよう内容をさらに充実させるとともに様々な工夫を行っていく。
		② 地域や近隣の小・中学校、大学等との交流事業、学校行事等、本校の特色ある教育活動の様子を、積極的かつ即時性をもってホームページに掲載、発信していく。	総務課 各コース	学校行事・校内の様子に関してその都度、担当部署が発信を速やかに行う習慣が定着してきている一方、部活動においては活動が低調気味であるものもあり、発信する内容に苦慮している部分もあると思われる。部活動の活性化について、議論を重ね、対応を考えていきたい。	【努力指標】 行事が終了することに情報の更新を速やかに行う。部活動に関しては各学期ごとに最低1回は更新する。	担当する部署(課・学年等)や部活動におけるホームページの更新回数が、年3回以上であると答える教員が A 85%以上である B 75%以上である C 65%以上である D 65%未満である	C評価以下の場合 は、結果を分析して改善策を検討する。	7月、1月に調査する。(教員によるアンケート)	79.3% B R5:100:A	各部署ごとに情報を発信する体制が共有されており、職員全体としてホームページへの関心が高まってきている。芸術コースを中心としたコンテンツの充実や学校行事のこまめな掲載により、閲覧数も昨年度までの白と平均1000程度から2000程度へと増加しており、外部への認知度も向上してきている。
		③ 生徒自らが地域や保護者の方々とともに行う行事を企画し、主体性や社会性を身につけ、一人ひとりが充実感・達成感を得ることができるような生徒支援を行っていく。	生徒課 各学年	生徒会が中心となり、生徒主体で辰巳祭等の学校行事を行っていく土壌が形成されてきているが、その一方で学校行事以外の日々の活動において、積極的に参加している生徒はそれほど多くない。今後は多くの生徒が学校生活の中で充実感を得ることができるように工夫していきたい。	【満足度指標】 生徒が生徒会行事に主体的に関わり、より積極的に参加し、充実感・達成感を得ることができる。	学校行事や生徒会活動に積極的に参加していると答える生徒の割合が A 90%以上である B 80%以上である C 70%以上である D 70%未満である	C評価以下の場合 は、結果を分析して改善策を検討する。	7月、1月に調査する。(生徒によるアンケート)	79.6% C R5:76.4:C	生徒全体で企画・運営する辰巳祭以降は、生徒が企画からかかわる行事が少いため、「積極的」という部分で中間評価よりも数値が下がったのではないかと考えられる。生徒アンケートなどにより多くの意見を集約し、生徒がかかわる部分を増やすような行事の企画・立案を行ってほしい。
学校関係者評価委員の評価										
・ホームページの内容やレイアウトが工夫されてきており、学校の様子がよりわかりやすくなっている。 ・生徒数が少ないということもあってか、教員が手厚く生徒の教育にあたっていることを看取することができた。										
学校関係者評価委員の評価結果を踏まえた今後の改善策										
・ホームページについては、本校を広く社会に認知し、理解して頂けるツールとしてさらに工夫を重ね、即時性を意識しながら活用していきたい。 ・今後も生徒への手厚い教育を行っていくとともに地域社会との連携も密にとりながら生徒の社会性の涵養にも努めていきたい。 ・外部団体とより密接に繋がることで、多様な生徒がコミュニケーション力を向上させ、社会性を獲得していくことに繋がる取組を今後も継続・発展させていきたい。										
4	教育活動の効果をより一層高めるため、学校や教員が担う業務の整理、ICT機器活用による業務の効率化や業務分担の適正化等に積極的に取り組む。	① 働き方を再考・工夫し、すべての職員が、生徒一人ひとりに丁寧に関わりながらも、学習指導・生徒指導などの業務に専念できる環境づくりをさらに進めていく。	管理職 各課・室 各学年	管理職の声かけや業務の整理、アドバイス等が高い評価値となっていたが、夏期休業以降の補習や個別指導、学校行事の準備等による繁忙期の業務集中によって年度後半にはやや数値が下がった結果となっている。今後は行事の精選や業務の平準化などによって「教員の働き方改革」や「ワークライフバランス」の実現に向けてさらなる取組を推進したい。	【満足度指標】 全職員が計画的な業務の遂行を意識し、教材等の共有をはかるほか、役割分担の見直しによる業務の平準化を行い、組織的な学校運営を行うことで、時間外勤務時間を減らす。	業務の平準化や部署間の連携により、働き方を改善する努力がなされていると答える教員が A 80%以上である B 70%以上である C 60%以上である D 60%未満である	C評価以下の場合 は、結果を分析して改善策を検討する。	7月、1月に調査する。(教員によるアンケート)	58.6% D R5:33.4:D	昨年度の33.4%よりは向上したが、一昨年度の72.0%と比較して数値減となった。主要因として長期間不交代となった職員の業務の分担割合にともなう負担増やクラス数の増加にもかかわらず正規職員数の増員がなかったことによる分業業務の質的負担増があげられ、前期につき、これらの要因が複合的に影響したものと考えられる。
学校関係者評価委員の評価										
・公立学校であるが故の各種の調査や報告業務について、よりDX化を推進した取組を行うことで、「働き方改革」を実践することができるのではないかと。 ・NPO法人や社会活動団体等、校外の組織を活用していくことにより、「総合的な探究の時間」の活動における教員の業務負担を軽減できるのではないかと。										
学校関係者評価委員の評価結果を踏まえた今後の改善策										
・生成AIを活用した新たな取組により、より生徒が学習内容を理解しやすくなる教材を作成しつつ、教員の教材作成に関わる時間の短縮にも繋げていきたい。 ・DX化のみならず、業務分担のあり方を工夫することで、より「働き方改革」を推進していきたい。										